

青年期女性のキレについて

—自己愛傾向と自尊感情の観点から—

KIRE among adolescent women
—from a viewpoint of narcissistic tendency and self-esteem—

原田 奏江
Kanae Harada

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : キレ, 自己愛的憤怒, 自己愛的脆弱性, コフト
Key words : KIRE, Narcissistic rage, Narcissistic vulnerability, Kohut

1. 問題

1-1. “キレること”について

近年、「キレる」という言葉が頻繁に用いられるようになり、青少年が社会との関係を絶ったり、衝動的・破壊的な行動をすることが問題視されてきた(宮下ら, 2002).

宮下ら(2002)によると、「キレる」と言う言葉や表現は、1980年代から90年代にかけて発現し、日常的に用いられるようになる前と後とでは、その行動の意味はかなり変容してきた。例えば、1970年代初頭からは子どもから親への家庭内暴力が注目され、1980年代には、10代から20代前半、特に中学・高校生を中心とする青少年、その多くは大人しいよい子とみられてきた子どもたちが家庭内で突然、豹変することで、社会的にも大きな関心が寄せられてきた。しかし、この時期の家庭内暴力に対する理解は、本人や父親、母親の性格傾向や家庭内心理力動によるものが大半を占めていた。つまり、基本的な家族構造としては、母親の過保護・過干渉による密着した母子関係と、父親の心理的不在がみられた。こうした家庭環境の中で、子どもが青年期を迎えた時、自立しようとする努力と、母親に依存したもとの安全な場所を維持したいという思いが入り雑じり、最も親しい家族に対して暴力が発現するとされてきた。

一方、特に「キレる」という言葉の定義自体は、未だ研究者間で異なり、“怒り”以外のより包括的概念を含む用語であるという指摘もある(竹端ら, 2010)。竹端ら(2010)は、「人が“キレる”場合、ストレスが溜まった状態にあり、何かしらの不快

刺激が与えられることで、不快感情とそれに伴った衝動的な攻撃行動が発生する」という定義仮説を立て、次の研究を行った。まず、大学生を対象に、「キレた時の行動」と「キレた時の感情」の各質問紙を作成し、その後キレた時の行動とその感情との関連を検討した。結果、「キレた時の行動」では、①キレた時に相手に対して何らかの目に見える行動を起こす「表出行動」、②キレた時に“閉じこもる”“無口になる”といった「内閉行動」、③キレた時に相手に直接的にキレた行動を向けないようにしようとする「対処行動」の3因子が抽出された。一方、「キレた時の感情」では、①“興奮状態になる”“周りが見えなくなる”といった「感情制御不能」、②キレた時に“悲しくなる”“虚しくなる”といった「負の感情」の2因子が抽出された。いずれの因子間でも正の相関がみられたため、一部の大学生はキレた場合に、“キレる”行動に伴い、怒り以外の負の感情も生起すると考えた。

研究結果から、怒りを制御できない状態の時に、その怒りを「キレる」という行動で表出すること、また、その怒りを内に溜める方略は「慢性的な我慢状態(磯崎, 2006)」を作り出し、さらにこの慢性的状態があるため、何かしらのきっかけにより表出行動につながる可能性があることが示唆された。一方、感情面では、「負の感情」において、キレた時に怒り以外の“絶望感”や“虚無感”といった抑うつ的な感情が引き起こされていることが示唆された(竹端ら, 2010)。

なお、怒りと心の健康との関連について検討し

た研究の中では、“怒り”と“抑うつ”について検討したものが最も多かった(湯川, 2008). 精神分析の理論において、本来は他者に向けられるべき攻撃性が自己に向けられた時、抑うつ感情が発生するという仮説がある。よって、攻撃性は怒りにより生じる場合が多いことから、怒りが何らかの理由によって自己に向けられた時、攻撃でなく抑うつを生み出すというプロセスに発展する可能性が考えられる(湯川, 2008).

1-2. Kohut の自己愛的憤怒について

精神分析家の Kohut は、“怒り”そのものは本能的なものではなく、自己の傷つきに対する二次的な反応である「自己愛的憤怒」として生じるとした(角田, 2014). これは、相手が共感的な反応を示してくれなかったり、恥をかかされた時の激しい怒りを指し、容赦のない憎しみと残忍性によって特徴づけられるため、健康な攻撃性である自己主張とは異なる(和田, 1999). なお、自己愛的憤怒とは、挨拶をしても相手がそっけない時の一時的な不快感から、妄想的患者が世間に不当に扱われていると訴える際の極端な不平のようなものを含む、自己愛が傷つけられたことに対する体験の幅広いスペクトラムを全て指す(和田, 1999).

そもそも人間は、自己を価値あるものと感じ、自己に肯定感を抱きたいと願っており、それを可能にしてくれる周囲からの応答を求めている。宮下ら(2002)は、これを欲求の広義での「自己愛」と定義した。上地ら(2005, 2009)は、自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し、心理的安定を保つ力が脆弱であることを「自己愛的脆弱性」と定義した。自己愛的脆弱性を抱えた人が何らかの傷つき体験をし、耐えがたい無価値感や無力感に捉われた時、それへの反応として激しい怒りと攻撃が生じ、それらが非常に破壊的なものになると考えた。

1-3. 自己愛傾向と攻撃性との関連

自己愛傾向の先行研究では、周囲を気にかけない「誇大型」と、周囲を過剰に気にして傷つきやすい「過敏型」に類型化された研究が多くなされてきた(神谷, 2014). 日本では、臨床群・非臨床群ともに過敏型が問題視されることが多く(神谷, 2014), 過敏型の諸側面を考慮した概念に「自己愛的脆弱性」がある。

一方、従来、攻撃行動に関しては、男性の方が

女性よりも攻撃行動を示しやすいことが明らかにされてきた(Eagly & Steffen, 1986; Hyde, 1984). また、怒りに関する生理的変化や、基本的な内的経験にはあまり文化差はないが、表出・対処スタイルなどの特に行動に関わる部分については、文化的な価値観が影響していた(湯川, 2008). 例えば、アメリカの子どもは日本の子どもと比較すると容易に怒りを表出し、攻撃的行動も最も多く(Zahn-Waxer et al., 1996), 湯川(2008)はこれをアメリカ社会では自分の意見をはっきりと他人に表明することが奨励される一方、日本社会では和を乱すような言動は望ましくないと考えられているためと考えた。

しかし、日本では大淵(1987)が、怒り経験は男女に共通する経験であるとした。さらに、“怒りの喚起”に関しては、あまり性差がなく、もしくは女性の方が怒りを喚起しやすいが、その表出を抑制しやすく、男性では表出しやすいことが示唆された(井上, 2000). また、女性は相手の性別にかかわらず見下されると怒りの感情を示すことも示唆された(岡田, 2001). なお、怒りの抑制により、怒りの増幅や健康の問題が促進される可能性があるとも言われてきた(田代ら, 2013).

蛭田(2014)によれば、山崎(2008)は「自己愛的脆弱性は他者への攻撃性を持ちながら、周囲に気兼ねする性質のため表出が抑制されたり、自分に向けられたりする可能性がある」と考え、“攻撃性の方向”に着目した。この攻撃性の方向とは、暴力、暴言など他者へ向けられる「外向攻撃性」と、罪悪感、自責感、自傷、過食・拒食など自分の心身に向けられる「内向攻撃性」の2方向を指す。

蛭田(2014)は、大学生を対象に、自己愛傾向と攻撃性の方向との関連を検討した。結果、誇大型では、外向攻撃性の「言語的攻撃」と内向攻撃性の「自責感」が有意に高く、一方、過敏型では、外向攻撃性の「敵意(他者に対する否定的な信念・態度)」と「短気(怒りの喚起さやすさ)」が高く、内向攻撃性の「自責感」と「自己破壊行動」も有意に高いことが示唆された。

よって、誇大型では、内的な自責感を抱くものの、攻撃性は言語的な形で外へ向き、過敏型は、敵意を抱いたり怒りを喚起するものの、その攻撃性は自責感や自己への破壊衝動という内向的な形で表れることが示唆された。

1-4. Kohut の自己心理学からみた悲劇人間モデル

和田(1999)は、Kohut の指す、“思うように周囲の人間が自分に共感してくれない” “自分のことをわかってくれない” という周囲の反応欠如に苦しむ人々を「悲劇人間」と呼んだ。彼らは自己の心の世界がバラバラにならないよう、たえず支えてくれる他者を求めており、“自分がない” “自分がバラバラになりそう” “わかってほしい” という思いを抱えていると考えた (和田, 1999)。

そもそも Kohut は、パーソナリティの中核を表す自己の発達には、対象関係が不可欠だと考えた。Kohut が創始した自己心理学では、関係性のなかでの自己の体験を中核とし、精神病理の全てのかたちは自己の構造の欠陥に基づくとした。こうした全ての自己の欠陥は、幼児期の自己対象体験の障害によるものとした(本条ら, 1995)。

Kohut のいう「自己対象」とは、実存の外的対象ではなく、自己が喚起され、支持され、維持される際の自己の主観的体験の一側面を表すものであり(安村, 2016)、すなわち、自己の重要な一部として経験される対象であった(和田, 1999)。

そして、伊藤ら(2004)によると、Kohut は、基本的に2つの自己対象を想定し、それが適切な反応をすることで、自己の中核的な2つの部分が形成されるとした。一つは「鏡映自己対象」によって満たされることで生じる「野心の極」であり、これが形成されることで子どもは生来もっている活力を発揮し、周囲から承認を得られるような言動をとるための自己動機づけのもとになる。もう一つは「理想化自己対象」によって満たされることで生じる「理想の極」であり、これによって、子どもは安心感を覚えたり、自分の正義や道徳の考え方を信じていくことができたり、自分の能力に対する信頼感をもつことができるとした。Kohut は、人間の自己の主観的な体験世界は、この2つの極を行ったり来たりする双極的なものであるとした(図1参照)。

また、Kohut は養育者とのこうした自己対象体験が十分にあった上で、子どもの発達に応じた適量の欲求不満を与えることにより、これまで養育者が担っていた、自己を安定化するための諸機能が内在化される「変容性内在化」が生じるとした(神谷, 2014)。なお、Kohut は、自己対象が機能であることを強調し、子どもが対象としての養育者に反応するのではなく、養育者による映し返しや理想化に反応することを明確化した(竹友ら, 1993)。

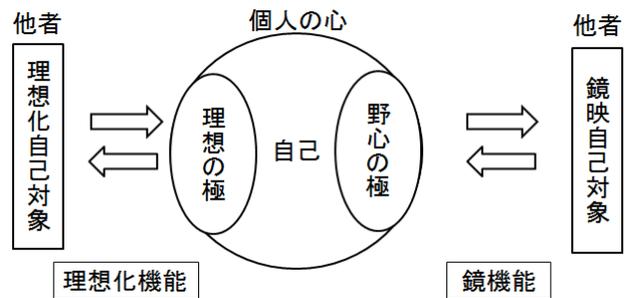


図1 Kohut の悲劇人間モデル(和田, 1999)

1-5. 自己愛傾向と自己対象体験との関連

羽川(2008)は、青年後期の大学生や社会人を対象に、自己愛傾向と、母親・父親・重要他者それぞれの自己対象体験の関連を検討した。なお、調査時に誇大型と過敏型を測定する「ナルシズム尺度(高橋, 1998)」と、鏡映、理想化、双子の3因子からなる「自己対象体験尺度(小林, 2006)」を使用した。因子分析後、ナルシズム尺度(高橋, 1998)からは、「有能感」「自己顕示・賞賛欲求」「対人過敏性」「対人消極性」の4因子が抽出された。

結果、女性では、母親との自己対象体験で、鏡映・双子自己対象体験が高いほど、有能感が高まり、理想化自己対象体験が高いほど、有能感が低くなることが示唆された。また、父親との自己対象体験では、双子自己対象体験が高いほど、有能感と自己顕示・承認欲求が高まり、理想化自己対象体験が高いほど、対人消極性が高まること示唆された。また、重要他者との自己対象体験では、鏡映自己対象体験が高いほど、対人消極性が低くなること示唆された。

また、神谷(2014)は、大学生・院生を対象に、自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との関連を検討した。その際、調査時に「自己対象体験尺度(小林, 2006)」と、①自己顕示抑制(自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向)、②自己緩和不全(不安や抑うつを自分で緩和する力の弱さ)、③潜在的特権意識(自分への特別の配慮を求める傾向)、④承認・賞賛過敏性(周囲からの承認・賞賛に対する過敏さ)の4因子からなる「自己愛的脆弱性尺度(NVS)短縮版(上地ら, 2009)」を使用した。なお、自己対象体験尺度(小林, 2006)では、発達に従い、先生や友人、恋人、趣味などに自己対象体験が拡大していくため(神谷, 2014)、回答時に想定する人物を特定しなかった。

結果、鏡映・双子自己対象体験が高いほど、自

己顕示抑制は低く、自己緩和不全は高くなることで示唆された。一方、理想化自己対象体験が高いほど、自己顕示抑制、自己緩和不全、承認・賞賛過敏性のいずれもが高くなることで示唆された。

以上の羽川(2008)と神谷(2014)の研究から、両親等の重要他者との鏡映・双子自己対象体験が多い場合には、自己愛傾向の「誇大型」との関連が示唆された。つまり、他者から自己の表出した感情や行動を映し返され、承認・賞賛される体験や、自己と対象の間に類似性や共通性を感じる体験が多いと、自己の有能感が高くなるため、自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向が低くなったと考えられる。

一方、両親等の重要他者との理想化自己対象体験が多い場合には、自己愛傾向の「過敏型」との関連が示唆された。すなわち、有能感が低く、不安や抑うつを自分で緩和する力が弱く、自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向にあり、周囲からの承認・賞賛に対して過敏であるため、対人消極性が高かった。これは、そもそも「理想化自己対象体験」尺度は、“その人のようになりたいと自分があこがれている”“自分よりも優れた能力を持っている”等の項目から構成されていた。つまり、自分よりも優れている理想化した対象がおり、自分はその人のように有能でないと感じているため、自己表現を抑制したり、人に対して消極的になる一方で、周囲からの承認・賞賛を求めて過敏になっている可能性があると考えられる。

2. 研究目的（仮説）と方法

よって、これまで自己愛傾向と攻撃性の方向との関連(蛭田, 2014)や、自己愛傾向と自己対象体験との関連(羽川, 2008; 神谷, 2014)を検討した研究はみられるものの、自己対象体験が自己愛傾向を介して、キレた時の行動へ与える影響を検討した研究はみられない。

そのため、「他者との自己対象体験が十分でない」と、自己愛が脆弱で傷つきやすくなり、外にも内にもキレやすくなる」という一連の関連を明らかにすることは、心理臨床場面において、自己愛傾向を有する者やキレやすい者に対する介入方法の新しい知見となるだろう。さらに、個人のキレた時の内的過程を明らかにすることで、Kohut のいう自己愛的憤怒のスペクトラムの一部を明らかにすることができ、心理臨床場面に即した知見や治

療的介入の要点を見出すことができるだろう。

[本研究の目的 1]

1) そこで、本研究では、Kohut の自己対象体験の観点から、“自己愛傾向”と“キレること”との関連を、質問紙調査により明らかにすることを、第一の目的とする。なお、本研究では、主に鏡映・理想化自己対象体験が内在化されることで、成熟した自己愛が発達すると考え、自己対象体験をそれぞれに分けず、合成変数として使用する。

[仮説 1]

①自己対象体験が多い場合、自己愛傾向の誇大的側面が高くなり、キレた時に「表出行動」を取るだろう。

②自己対象体験が少ない場合、自己愛傾向の脆弱的側面が高くなり、キレた時に「内閉行動」を取るだろう。

[方法 1]

調査対象者：青年後期の女性、200 名程度。

本研究では、慢性的に我慢することで怒りを増幅させ、抑うつ状態を引き起こすと考えられている怒りの抑制(竹端ら, 2010; 田代ら, 2013)に着目し、怒りを抑制しやすい女性のみを調査対象者とする。

調査時期：平成 29 年 5、6 月頃を予定。

測定尺度：

①自己対象体験尺度(小林, 2006)、全 15 項目、5 件法。調査時に、自分にとって「重要な他者」を想起し、回答してもらう。

②自己愛人格尺度(NPS)短縮版(谷, 2006)、「有能感・優越感」「自己主張性・自己中心性」「注目・賞賛欲求」「自己愛性抑うつ」「自己愛的憤怒」の 5 因子からなる。計 25 項目、5 件法。

③キレた時の行動に関する項目(竹端ら, 2010)のうち、「表出行動」と「内閉行動」の計 27 項目、5 件法。

[本研究の目的 2]

2) 次に、1) の質問紙調査後、半構造化面接により、キレた時の行動と感情面を調査し、KJ 法により、自己愛的憤怒のスペクトラムの一部を明らかにすることを、第 2 の目的とする。

[方法 2]

調査対象者：第一研究で調査協力者を募り、参加希望をしてくれた者 (5-10 名程度)。

調査時期：平成 29 年 7、8 月頃からを予定。

3. 研究実施内容

これまで、研究目的の“キレること”や“怒り”について学ぶため、また自己愛的脆弱性や自己愛傾向、そして怒りや攻撃性との関連についてのさまざまな先行研究や書籍を読むことで、本研究における知見を深めてきた。さらに自己愛の概念を捉えるうえで重要と考えられる「Kohutの自己心理学」に着目し、その理論を書籍や先行研究を通して学び、本研究の新たな観点として取り入れた。

そして、平成 28 年 9 月には、日本心理臨床学会第 35 回大会の口頭発表やポスター発表に参加し、主に自己愛傾向と家族関係との関連や、自己愛傾向と攻撃性との関連についてさらに知見を深めてきた。さらに、平成 28 年 11 月には、アンガーマネジメント研修会に参加し、怒りの感情やキレること、そしてその対処法について学び、本研究に関する見識を深めてきた。

4. まとめと今後の課題

これまで、本研究で使用する概念やそれらの関連についての知見を深めてきた。

そして、平成 29 年度 3 月に行われた、専攻内の平成 29 年度構想発表会において、新たな見識が得られた。それを踏まえて、“キレること”についての定義や、“キレること”と“自己愛”についての関連を、先行研究や書籍を通してさらに学び、検討していくことが今後の課題である。

また、本研究の実施方法をさらに具体的に明示し、本研究を平成 29 年 4 月末頃の研究倫理審査に提出し、第一研究の質問紙調査を平成 29 年 5-6 月頃に実施し、さらに平成 29 年夏頃から第二研究に取り組むことが今後の課題であると考えられる。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 28 年度大学院生研究助成(B)(課題番号 DB2830)より研究助成を受け行った。

5. 主要引用・参考文献

- [1] 相澤直樹 (2003). 青年期自己愛的人格における誇大特性と過敏特性の関係について——相関分析、クラスター分析、文章完成法を用いた補足的な研究—— 神戸大学発達科学部研究紀要, 11(1), 147-159.
- [2] 羽川可奈子 (2008). 青年期後期の自己愛と自己対象体験に関する研究——母親、父親、重要他者との自己対象体験に着目して—— 日本青年心理学会大会発表論文, 16, 42-43.
- [3] 日比野 桂・湯川新太郎・小玉正博・吉田富士雄 (2005). 中学生における怒り表出行動とその抑制要因——自己愛と規範の観点から—— 心理学研究, 76(5), 417-425.
- [4] 蛭田陽子 (2014). 無関心型および過敏型自己愛傾向と攻撃性との関連——外向・内向攻撃性および個人の内的過程に着目して—— 弘前大学大学院教育学研究科 2013 年度修士論文, 584, 1-80.
- [5] 神谷真由美・高野恵代 (2013). 大学生の心理的な支えと自己愛的脆弱性との関連——自己対象体験による検討—— 教職研究, 6, 11-19.
- [6] 神谷真由美 (2014). 青年期の自己愛的脆弱性と発達早期要因の検討——心理社会的課題、愛着スタイル、自己対象体験との関連—— 広島大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊).
- [7] 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフト自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14(1), 80-91.
- [8] 小林卓也 (2005). 自己対象体験と対人関係のあり方との関連——大学生を対象として—— 東京成徳大学臨床心理学研究, 5, 3-10.
- [9] 宮下一樹・大野 久 (編) 青木 一・關崎 学・信原孝司・菊谷紀聡・一円禎紀・河野莊子・岡本祐子・夏野良司・森脇雅子・栗城順一・門永由美・山口賢二・林 智一 (2002). キレる青少年の心——発達臨床心理学的考察—— 北大路書房.
- [10] 竹端佑介・永田陽子 (2010). 大学生における「キレ」行動と「キレ」感情に関する研究——質問紙からの検討—— 駒澤大学心理学論集, 12, 7-12.
- [11] 和田秀樹 (1999). 〈自己愛〉の構造——「他者」を失った若者たち—— 講談社選書メテエ.
- [12] 湯川進太郎 (2008). 怒りの心理学——怒りとうまくつきあうための理論と方法—— 有斐閣.